

《フォーラム》

神話と歴史

—— 神話を学ぶ観点 ——

庄子大亮

はじめに

帰属は「西洋古代史」, 「古代ギリシア史」ということになる私の関心の焦点は, 「ギリシア神話」である。さかのぼれば幼少時から, 科学的説明の範囲外にあるようなあらゆる不思議な話に興味があったのだが, 一見して不思議に思える事象にも多くの場合, 文化や歴史の背景があると知るようになるとともに, 象徴的な例として古代の神話に関心を深めるようになった。そして特に神話が語られる歴史的な文脈, 神話の歴史的な影響等に着目し, 幸か不幸か歴史研究者として神話を考察対象にしている。しかし「歴史」と「神話」には, やはり相反するイメージがあり, 特に研究の世界においては, 「歴史の分野で神話など扱えるのか」, 「扱うことに意味があるのか」といった懐疑の眼差しを向けられることは少なくない。たしかに, 神話を歴史の立場で扱うことは諸々の問題ををはらむのだが, もちろん自身は大いに意義を認めて今に至る。そうした考えの一端はすでに十年も前, 本誌において歴史を学ぶ意味に絡めて述べたことがあった(「提言: 歴史と現代との関わり」『西洋古代史研究』第4号, 2004年)。その後の関心の変化や研究のささやかな進展をふまえつつ, 自身の拠って立つところと展望について再考してみたのが本稿である。

今回このような執筆に至った経緯について, もう少し説明させていただきたい。近年, 歴史を学んでいる複数の学生から, 神話をテーマにしたいのだがどうしたらよいか, という相談を直接間接に受けることがあった。なにしろ自身も手探りでやっているようなところがあるから, 有益なアドバイスはたいしてできなかったけれども, あらためて自身の関心をふり返るきっかけとなっていた。また, 最近お会いした, ある出版社の編集者にお聞きしたところでは, 神話関係の本は「歴史」ジャンルとして企画しているという。私が西洋史の教養授業を担当している京都の佛教大学には近年「歴史学部」が誕生したのだが, そこでは(今のところ日本中心に)神話伝承を学ぶコースがある。「神話」と「歴史」は重なり合いながら多くの人の関心をひいているようである。実は私の友人や同僚の複数からも, もともと神話への興味から歴史の世界に踏み入った, という話を聞いたことがある。しかし, みな現在は神話とはあまり関係ないことを探究している。何をどう学んでいいかわからないうちに, 全

く別のテーマを選ぶことになったという。結果的にその方がよかったのかもしれないが、本来の関心に沿って学べなかったのはやはり残念な部分もあるだろう。

そんななか、執筆の機会をいただいたので、あらためて「神話」と「歴史」の関わりについて考えてみることにしたわけである。個人的思いならば頭の中だけでご自由にどうぞ、ということになるのだが、歴史を意識して神話を学びたいという先述のような初学者や、正面から神話を研究しなくても授業などで扱う可能性がある研究者・教育者にとって、何か参考になれば幸いであると思い、こうして人の目にふれる文章にさせていただいた。だから本稿は高度な内容の研究論文ではない。またこれまでの自身の研究をふり返ってまとめており、全く新しい斬新なことを述べるようなものでもないことをおことわりしておく。

本稿の構成だが、まず、「神話」とはどんなものを指しているのか、どうやって受け継がれてきたのか、その定義や継受を確認していく。そのうえで、神話を扱う諸研究を紹介しつつ、神話と歴史の関係性を意識しながら学ぶ意義等について考えていきたい。

1. ギリシア神話とは？

本稿でいうところの「神話」という概念について確認しておこうと思うが、そもそもそれは、明確に、そして普遍的に定義できるものなのだろうか。実はこの点には議論があり、これまで多くの定義が提案されてきたが、万人が納得するような定義はいまだ存在しないのが実状である¹⁾。しかしながら、多くの研究者が依拠する定義としては以下がある。それは、「神話とは、共同体にとって重要な何らかの事柄についての二次的で偏向した言及を伴う、伝統的な物語である」²⁾という、W・ブルケルトによる定義だ。ブルケルトはギリシア神話を念頭におきつつも、人類学的な視野をもってこのような包括的な定義を提示している。筆者もこの定義を出発点としているが、筆者なりに説明を補いつつ、もう少し限定したい。

まず、「神話」とは事実をそのまま正確に伝えているものではない。その意味で「二次的で偏向した」物語である。ただし、神話を語り継ぐ人々にとってそれは事実であるか、もしくは事実と虚構の二項対立を越えた次元にあるということをおまえておきたい。そして、古代ギリシアを念頭に話を進めるうえで、「伝統的な物語」を「神々と英雄たちの物語」と限定する。ギリシアでは、神々の物語に加えて、神々の子孫とされる人間にまつわる歴史性を帯びた物語、すなわち、太古に実在したと考えられていた偉大な「英雄 heros」（ヒーローの語源ヘーロース）たちの物語が数多く存在した。英雄たちは神々の血統を受け継ぐ「半神」とも呼ばれ（「ヘミテオス hemitheos」、テオスが神）、神々と連続性を有していたように、神々の物語と英雄たちのそれについてギリシア人は区別していなかった（研究上の区分については後述）。一方でギリシア人は、神々と英雄たちが近い関係にあった時代を、当代と隔てられた太古の時代として意識し、彼らにまつわる物語を当代の人間についての出来事と明確に区別していた³⁾。そのように対象化され、詩人をはじめとした語り手たちによっ

て受け継がれて、ある程度の体系化を伴って広く共有されていた神々と英雄たちの物語こそ、ギリシアにおける最も「伝統的な物語」といえるのである。なお、こうした物語の舞台は基本的に太古であるが、当代に神意が示されたとか、英雄が姿を現したといった付随する話を排除するものではない。さらに、「伝統的」とは物語の創作も排除しない。そもそも物語することは、様々なレベルでの創作を常にともなうだろう。何らかの意図のもとに新しく創られた物語であっても、当代の世界観に合致して語り継がれる可能性を有するようなものであれば、「伝統的」と解すこととする。以上に留意したうえで、筆者としては「神話」という語を「神々とその子孫たる英雄たちにまつわる伝統的な物語」として用いているのである。

ところで、「神話」と日本語に訳されているのは、英語では *myth* という言葉であり、ドイツ語では *Mythos*、フランス語では *mythe* という。これら欧語の単語は、古代ギリシア語の「ミュートス *mythos*」に由来している。ミュートス自体の語源は定かでないが、どうやら擬声語から生まれた言葉であったらしい。もともとこの語は古代ギリシアにおいて「言葉、話、物語」を意味していたが、歴史の父と評されるヘロドトスの用例のごとく、文脈によっては「作りごと、嘘の話」という意味でも用いられるようになった⁴⁾。現在我々が捉えるような「神話」を指す言葉としては、18世紀まではラテン語の *fabula* やそれに由来するフランス語の *fable* が用いられてきたのだが、ドイツの文献学者 C・G・ハイネ (1729-1812) が神々の物語を研究対象として措定するために「ミュートス」という語を採用して以来、*myth*、*Mythos*、*mythe* という言葉が一般化したのである。なお日本でも、本来「神話」という言葉は存在しなかった。明治時代になってからその概念が輸入され、主に神々についての物語として「神話」という訳語が生まれたのである⁵⁾。

しかし、このように語源としてはミュートスに由来する「神話」という近現代の概念と、古代ギリシア人の「ミュートス」が全く同じわけではない。これが「神話」の定義を複雑にしている一因でもあり、留意が必要である。古代の「ミュートス」の用法についてだが、たとえば先述のヘロドトスは、英雄ヘラクレスがエジプトに行った際の逸話を「嘘の話」という意味で「ミュートス」と言っている (2巻45章)。だがヘロドトスは、この逸話に関してギリシア人がエジプト人の習慣を誤って伝えていることに対して「ミュートス」と言っているのであって、英雄ヘラクレスの存在は当然の前提になっているのである。さらに、批判的歴史叙述の祖とされるトゥキュディデスは、自らの著作を「ミュートス的 (*mythodes*) ではない」 (1巻22章) と述べ、その叙述からミュートスの排除を宣言しているのだが、ギリシア人 (ヘレネス) 全体の祖先とされるヘレンや太古の王テセウスに言及するトゥキュディデスのギリシア先史叙述 (1巻34章、2巻15章) は、現代の我々にとっては「神話」なのである。しかし、かといって「神話」という概念が実体をまったく持たないということではない⁶⁾。先述のようにギリシア人は神々や英雄たちにまつわる物語を当代の人間についての出来事と区別していたのであるから、ミュートスという言葉が近現代的な概念の「神話」と

全く同じわけではないということに留意したうえで、そうした物語を「神話」として措定することが可能である。

なお、人類学や神話学においては、創世の物語や超自然的な神々の物語を「神話」と捉え、主に人間が登場する歴史性を帯びた物語を「伝説 legend」として区分する場合が多い。ギリシア神話に関しても、日本では英雄たちの物語に対して「英雄伝説」あるいは単に「伝説」という表現が慣例として用いられることが少なくない。筆者自身も論考によっては区分したことがある。ただし繰り返すが、古代ギリシアに関わる文脈ではその区分は明確にはなされていないし、ここでは叙述を複雑にしないよう一括して「神話」という表現を用いる。

2. ギリシア神話の継承

次に、現代の我々が把握するところの「ギリシア神話」が、いかに継承されてきたのかについて概観しよう⁷⁾ (古代史の専門家にとってはいうまでもない内容を多く含むが、冒頭に記したように本稿は初学者も意識したものであるから、かなり基礎的な事項も述べることをお許し願いたい)。紀元前 17～前 13 世紀頃、ギリシアでは小王国が分立していた。現代の我々はその時代のことを、代表的な遺跡にちなんで「ミュケナイ時代」と呼んでいる。前 1200 年頃に王国分立時代は終焉を迎え (その理由について民族移動や気候変動など諸説ある)、人口が減少して国家と呼べるようなものが存在せず文字記録もない「暗黒時代」が四百年間ほど続いた。どうやらこの間に社会変化があったらしい。前 8 世紀、ギリシア各地でポリスと呼ばれる民主的な市民共同体国家が誕生するのである。以後、前 4 世紀にかけて古代ギリシア文化が発展していく。

ミュケナイ時代の記憶、さらにはそれ以前の遙か昔までさかのぼる記憶が、文字の使われなかった間も口承で受け継がれていたようである。前 8 世紀以降のギリシア人たちはそうした太古の時代を、神々と人間が近い関係にあり、神の血をひく英雄 (半神) たちが生きた時代と捉え、神々と英雄の様々な物語を語り継いでいった。ポリス成立の頃にギリシア人はアルファベットを用いるようになり、のちに文字に記録されることで後世に伝わった物語群を、我々は「ギリシア神話」として把握しているのである。

神話を伝えていたのは主に詩人たちであった。彼らは、大昔から受け継がれて伝統化した物語を、様々な機会において人々に歌い聞かせた。なかでも最も有名なものが、トロイア戦争について歌ったホメロスと、神々の系譜を歌ったヘシオドスである (ともに前 8 世紀頃)。また、祭典で上演された演劇 (ギリシア悲劇) でも神話が題材とされ、こちらも神話を伝える重要なメディアだったし、ほかにも神殿など公共の場の彫刻や絵画、日常生活で目にしただろろ壺絵などを通じて、人々は神話イメージと共に生きていたのである。

ギリシア神話是一人の王や一つの国の意図に沿って統一的に生み出され編集されたわけではないし、聖書のような聖典にまとめられたわけでもない。ホメロスやヘシオドスがいわ

ば「スタンダード」となって、主な神々・英雄のイメージや系譜、エピソードなどの枠組みが定まったといえるが、それぞれの土地の言い伝え、詩人や著述家の解釈、権力者の意向、等々を反映し、改変や創作が加えられ続けた。そのため、物語とイメージがたいへん豊かなのである（そして複雑であり、矛盾する内容も多く見られる）。

現代でも小説などが映画化される際に、諸般の事情で原作と内容が変えられたり、物語の続編のみならず「前日譚」が後から生み出されたり、本来は脇役であったキャラクターを主人公にした新たな物語が創られたりすることがあるから、物語が変化していくことはイメージできるかもしれない。ただし古代の場合、神話は伝統化されることで「事実」あるいは事実を超越して疑うことのできない「真実」と考えられた。何らかの意図のもとで個人の改変や創作があっても、それが語り継がれて定着すれば、作り話とは見なされなかったのである。そうした点で、神話は現代人にとっての「フィクション」とは異なる。たとえばギリシアの劇作家たちは、神話を題材に、同時代の社会問題なども意識して劇を創作したが、語り継がれてきた物語の大枠はあくまで維持した。このように、皆が好き勝手に話を作っていたというわけではない。誰がいつ言い出したかわからない、だからこそ古来の「本当の事」として伝統になっている神話の中核が定まっていたうえで、解釈や創作が付け加えられ、社会・時代が受け入れたものが広まり、浸透し、また新たな伝統となっていくのである。

ギリシア神話の神々は、キリスト教などとは違って、人間の良いところも悪いところも極端なかたちで投影されているような存在である。善良とは限らず、騙し合ったり姦通したりする神々について、下劣と批判したのが哲学者クセノファネス（前6世紀）だったが、その「神話批判」は神々や英雄の存在自体を全否定していたのではない。この点ではのちのプラトンも、神話の非倫理的内容を批判したが、教育に役立つような立派な神々と英雄の姿を語るべきと考えていた。これは「内容」についての意見であり、基本的に神々の実在は信じられていたし、プラトンの意見はむしろ神話が社会に多大な影響力をもって浸透していたことを示すともいえるのである。

ところで、よく「ギリシア・ローマ神話」という言い方もする。その後の神話の継承をたどりながら、そうした呼び方の背景も説明しておこう。ギリシア文化の影響を受けながら発展していったのがイタリアのローマである。ローマはイタリアを統一し、前2世紀にはギリシアを征服する。さらに地中海世界を支配し、のちのヨーロッパの土台を築いた。ギリシア文化と、それを受け継いでときに発展させたローマの文化が、西洋文化の基礎である。このローマの神々は、ギリシアの神々と重ね合わされるなど、ギリシアの影響を強く受けていった。そのため、たとえば「ゼウス」という神はローマのラテン語では「ユピテル」（英語でジュピター Jupiter）と呼ばれるように、ほぼ同じイメージの神について複数の呼び名が並存している（神々の名はこのラテン語由来の英語名のほうが有名な場合も多い。ギリシア名：ヘルメス→ラテン名：メルクリウス Mercurius →英語名：マーキュリー Mercury）など。もちろん、ローマ独特の要素も残ったし、オウィディウス（前46～後18）などローマ

の詩人によって神話物語はより豊かになったという面もある。またそもそも後世の人々が神話を知ったのは、まずローマの文学を通してだった。このようなローマ経由の事情を考慮して、ギリシア・ローマ神話と表現することがよくあるのだ（ただしここでは紙幅も限られているので、「ギリシア神話」に焦点を絞って扱う）。

ローマが帝国となって地中海世界を支配した時代に、東地中海沿岸部において誕生したのが、一神教のキリスト教である。キリスト教は新興のあやしげな宗教と見なされ迫害をうけながらも徐々に信者を増やし、紀元4世紀にはついに国教となった。ローマ帝国解体後もキリスト教は受け継がれ、ヨーロッパの宗教として定着したわけだが、そのキリスト教のもとでも古代の多神教の神々は消え去ることなく受け継がれた。キリスト教以外の神々はたとえば、「死後に崇められた太古の権力者や偉人、つまり人間のことだからキリスト教の唯一の神とは矛盾しない」と考えられ、その物語が語られ続けたのである。それに、神話に登場する者たちは、星や星座と重ね合わされたり、自然の力や人間の徳などを擬人化した表現と理解されたりもして受け継がれた⁸⁾。

そして、古代神話にあらためて強く関心が向けられ、文学・芸術などで取り上げられるようになった画期が、14～16世紀頃にイタリアから各地に広まった古典復興、すなわちルネサンスの時代である。当時の著述家や芸術家たちは、古代神話を様々な表現に活用し、西洋文化の重要な要素として定着させた。たとえば、ルネサンスそして西洋芸術を代表する名画の一つ、ボッティチェリの『ヴィーナスの誕生』は、美の女神アフロディテ、ラテン語でウェヌス Venus（英語でヴィーナス）を題材にしている。

神話はその後、学問発達にともない研究対象にもなって、背景や意味が様々な観点から考察されるようになった。対象はギリシア神話だけにとどまらず、学者たちの視野はしだいに世界中の神話へと拡大し、やがて比較神話学も発達していくが、方法論などをめぐって中樞にあったのは、やはり西洋文化の大いなる源泉たる古代ギリシア神話の研究だったといえる。

一方で、古代とは違って神話自体は「虚構」と受けとめられるようになったわけだが、ギリシア神話に語られるトロイア戦争の舞台とされるトロイア遺跡（トルコ北西沿岸部）が1870年代に発掘され、遙かな太古をイメージして語られた神話の背景にはときに歴史的事実があることが示された。そこから、神話についての歴史研究の新たな地平も切りひらかれていったのである。

3. 神話をめぐる研究分野

次に、ギリシア神話をめぐる研究諸分野について簡単に紹介しておこう。欧米では、西洋文化の基礎として古典文化がたいへん重視されているから、その研究は「古典学 Classical Studies」と総称され、ギリシア神話研究はそこに含まれる形になるのだが、日本での研究状況もふまえてもう少し分類して述べる。

神話を伝える叙事詩や悲劇といった文学作品の理解を深化させようというのであれば、それは古典文学の立場での神話研究になろう⁹⁾。また、たとえば世界の成り立ちを神話によって人々がどう理解・説明しようとしたか考察したり、自然に対する意識など世界観を映し出すものとして神話を分析したり、哲学と神話の類縁性・連続性を議論したりするのであれば、それは思想史・哲学的文脈での研究にもなるだろう¹⁰⁾。

歴史学（西洋古代史、ギリシア宗教史）においては、「史料」として神話に着目することになる。ただし、神話自体が何か事実を伝えているのではないかという観点からのみ注目するのではなくて、たとえば政治的な宣伝のための神話利用、神話と儀礼の関わりなど、神話が当代の社会においてどうはたらき、影響を及ぼしていたかといったことも考察するわけである¹¹⁾。

さらに、神殿遺跡や神話を描いた図像などによっても神話についての多くの情報もたらされるので、ギリシア神話研究は考古学、図像学、美術史とも密接に関係しており、これらの分野で神話への造詣が深い研究者も多い¹²⁾。

そしてもちろん神話学を忘れるわけにはいかない。神話の形成、意味や影響について、ギリシアにとどまらず世界の神話間での比較も視野に入れ考察するのであれば、それは神話学（比較神話学）の領域である¹³⁾。神話学はときに宗教学の一分野としても位置づけられる。

また、ギリシア神話をときに考察の焦点としながら、そこにとどまらないアプローチとして、神話に人間の普遍的心理（有名なのがフロイトの提唱した「エディプス・コンプレックス」）を読み解くような、心理学、精神分析的観点もありうる¹⁴⁾。

諸分野は互いにリンクしあっており、上記のような区分はどの方向性の性格が強いかによる（そして大学のカリキュラムや研究者の「所属」や「肩書」による）便宜的なものでもある。先述のように、欧米では「古典学」という大きなカテゴリーが諸分野を内包していて、実際には分野横断的な研究が多い¹⁵⁾。神話を伝えるものを精緻に分析し、理解していくという、共通の基礎的作業をしっかりふまえたうえでならば、特定のスタンスにとらわれずともよいだろう。それに、ギリシア神話は後世に受け継がれて多大な影響を及ぼしているので、いずれの分野にせよ、古代にとどまらずに神話の継承を考察するといった研究もありうるから、ギリシア神話研究の展望はとても広いのである。

研究分野についてももう少し付言しておこう。既存の枠組みにとらわれすぎでは、いうまでもなく閉塞化に至ってしまいかねない。どんな分野であれ学際的な志向はこれからはますますあってしかるべきだろう。人文系学問を念頭においての話だが、人気のある分野があるのはもちろん、人気のない分野、社会的意義が外から大いに疑われてしまっている分野もある。そして危機感を覚えたのか、当分野の人たちがいまさらのごとく自分たちのやっていることの意義を考え、うったえようとする場合があるのだが、当分野の内部だけでそれをやったり、当分野の枠組みにあくまで拘泥してしまったりして、結局のところ閉塞な自己弁護に陥るだけの危険性もあろう。西洋古代史でいうと（人気のない分野とはいっていない）、西洋

古代の歴史や文化は、神話継受の例のごとく後世に多大な影響を及ぼしているわけだから、古代に立脚はしながら、中世や近代、さらには現代も意識し分野交流を進めていくような、多岐に渡る意義を実践的に示していくような研究志向が、もっともっとあってよいだろう。もちろん現実には、そのような視野を広げた研究は「広いが浅い」ものになってしまいがちであることは承知しているが、深すぎる穴に落ちて姿が見えず、狭くて身動きがとれないよりは、浅く広い穴で頭を出して動けるほうが良いという考え方もあろう。そうした志向は、様々な形でフィードバックされて古代史研究自体も豊かにするはずだ。このような点に関して、歴史研究においては異端視もされる「神話」という素材は、多様な研究分野と関わり、時代を越えて受け継がれ続けているのだから、分野間や時代間のつながり、拡がりをもたらす、たいへんおもしろい研究対象だと個人的には思う。

ともあれ、ここでは地にもう少し足のついた話に戻ることにし、筆者の関心と実践に基づいて、「歴史」において「神話」を扱う観点について紹介していこう。

4. 「歴史」において「神話」を見る

(1) 神々の成り立ちとギリシア人

周知のように、ギリシア神話の主だった神々を、オリュンポスの十二神という。最高神ゼウスを筆頭とする十二神が、ギリシア最高峰のオリュンポス山の天上に住んでいると考えられていたからである。ゼウスらに先だって世界を治めていたのが、クロノスを筆頭とするティタン神族（大地の女神ガイアと、天空神ウラノスとの間に生まれた神々）だった。クロノスの子のゼウスらオリュンポス神族が、親の世代すなわちティタン神族と戦ってこれを破り、その後ガイアが生み出した巨人族ギガス（複数形ギガンテス）をも破って、支配を確立させたという。

こうした神々の世代間闘争の背景には、先住民と侵入民の争いという歴史的出来事があるのではないかと指摘されてきた。ギリシア人の先祖は、前二千年頃に当地にやってきた人々である。もちろんそれ以前に住んでいる者たちがいたが、彼らは征服されるか侵入民と融合したらしい。この先住民について詳しいことはわからないのだが、古典的解釈として、ティタン神族やギガス族が先住民を、オリュンポス神族が侵入民たるギリシア人を象徴していると推測されているのである。

ところで、ゼウスは「女好き」で有名である。ヘラという正妻がいるのだが、他の多くの女神や、人間の女とも関係をもつ。オリュンポス十二神の太陽と音楽の神アポロンや、その妹で月と狩猟の神アルテミスは、ゼウスと女神レト（ティタン神族の娘）との子だし、英雄ペルセウスやヘラクレスはゼウスと人間の女性との子である。これらも、ギリシア人がゼウスを中心に信仰体系を築いていったことを反映しているのだと考えられる。つまり、ゼウスを主神として崇めたギリシア人は、移住、征服、新しい土地での定住、地域間の交流という

過程で、先住民の崇めていた神々や、同じ民族内でも集団・地域によって違いがあったはずの様々な信仰対象について、女神の場合はゼウスの妻・愛人としてたり、男神の場合は兄弟や息子にしたりといった形でゼウス中心に結びつけ、信仰体系を整理していったのであろう。また、分立した各地の支配者が神につながる系譜を主張して誇ったといった事情もおそらくあって、ゼウスにさかのぼる系譜がますます広がったと思われる。逆にいうと、こうした信仰、神話の「共有」によって、ギリシア民族は形成・発展・維持されていったという面もあるだろう¹⁶⁾。

さらに、交流をもつようになる異文化の信仰を取り込むこともあった。たとえば先述のアポロンについていえば、ミュケナイ時代の粘土板文書史料には登場しておらず、どうやら小アジアか北方から伝わってきた神格がのちにギリシア化され、その他の神々と相補うように文化的領域の神として発展・定着したと考えられている。また、ギリシア人がポリス成立期頃に用いるようになったアルファベットは、東地中海の航海民族フェニキア人の文字を真似たものであったように、ギリシア人はフェニキアの文化的影響を強く受けているのだが、「ヨーロッパ」という地名は、ゼウスがそのフェニキアの王女エウロペ（ラテン語でエウロパ）をさらってめぐった土地ということで名づけられたという。それは、ギリシア人が現実にはフェニキア人とその文化を強く意識していたことを反映している¹⁷⁾。

このように神話はギリシア人の始原からの歩みと密接に関わっている。ただしこうした神話解釈のためには、考古学的証拠など他の様々な論拠を考え合わせる必要があり、説得力をもって歴史的事実を捉えるのはかなり難しい作業でもある。史料としてはかなり曖昧なもの、と言わざるをえない。が、反面、想像力を喚起するともいえる。多くの人をひきつける神話の魅力はこのあたりにもあるのだろう。もちろん想像だけで語ってはならないが、昔の記録に書いてあることをそのままなぞれば済む研究などあるまい。特に史料の限られた古代史研究においては、程度の差はあれ、想像を伴った解釈をときにおこなう必要がある（それで終わりではなく、論理的、説得的に証明する必要もあるのはいうまでもない）。ともあれ、こうしたなかで神話は、はっきりした記録のない時代にも光を当てうる貴重な潜在史料であり続けているのである。

(2) 英雄の物語

神の血をひく英雄たちの物語の豊富さは、ギリシア神話の特徴である。そこで今度は、英雄神話（英雄伝説）を取り上げよう。英雄の物語といえば、まず挙げるべきはホメロスの英雄叙事詩である。『イリアス』と『オデュッセイア』の二編の叙事詩で、成立は前8世紀頃と推測されているが、伝える内容は、ギリシア人が前13～前12世紀頃に起こったと考えていたトロイア戦争を題材としている。ギリシア連合軍が小アジア（現代のトルコ、アナトリア半島）北西部沿岸のトロイアに遠征し、十年の攻防の末に陥落させたという戦いで、英雄アキレウスを主人公に戦争末期を描いたのが『イリアス』、戦後に英雄オデュッセウスが放

浪し、怪物との遭遇など困難を乗り越え帰国するまでを描いたのが『オデュッセイア』である。

後世、その物語は文学的に評価されていたものの、トロイアという都市の存在も含めて、作り話だと考えられるようになっていた。しかし19世紀後半、ハインリッヒ・シュリーマン（1822～1890）によってトロイアが発掘され、少なくとも物語の舞台が実在したことが示されたのである（彼は商人として財を成したあと、トロイア発掘の夢をかなえたというのが、幼少期からホメロスの叙事詩に興味を抱いていたというのは作り話ではないかなど、彼についての「神話」が批判的に検証されてもいる¹⁸⁾。そしてシュリーマン以後、さらなる発掘によって遺跡の破壊跡も確認されたことなどから、物語のもとになった何らかの歴史の出来事が実際にあった可能性も指摘されてきた¹⁹⁾。

西洋ではホメロスの叙事詩は教養としてなじみ深いものでもあったので、その物語の中核に歴史的事実が存在したというのは衝撃的なことであり、それから多くの学者たちも、ギリシア神話の背景に何らかの事実があると主張するようになった。神話のなかで重要な役割を担っている都市、つまり数多くのエピソードの舞台となっているような地と、発掘成果から推測されるミュケナイ時代の都市の規模や影響力の強さとが一致することも示されていた。1952年にミュケナイ線文字Bが解読され、神話における多くの固有名詞がミュケナイ時代の文書にすでに存在していたことが明らかになると、ギリシア神話はミュケナイ時代の記憶に由来していると考えられる傾向がさらに促進されたのである。

たしかに、全ての神話が無から創造されるわけではないだろう。何らかの事実が中核にある場合が少なくないと思われるが、神話は客観性を志向する歴史記録ではないし、そこには語られていく過程で様々な要素が投影される。神話を深く理解しようというならば、どのような意味を持って語られたのかが問われねばならない。もちろんこうした視点の研究も発展してきたわけである。そこで、ホメロスの叙事詩が語り継がれた背景の理解について、ほんの一端であるが例を挙げよう²⁰⁾。

叙事詩は、情報伝達的手段が限られていた古代において、様々な情報を伝えるメディアとしての性質を備えていた²¹⁾。たとえば各地の都市や国の成り立ちなど、諸物の由緒や、現実の王族貴族にもつながるとされた英雄の系譜が、ホメロスの叙事詩において語られる。英雄叙事詩は、それを語り継いだ当代の人々にとって、歴史教科書、百科事典のような要素をもっていたわけである。また、物語中のエピソードを具体例として、人々は様々な慣わし、自文化の行動原理を学び、世界観を共有したともいえる。たとえば、神の怒りによって疫病がもたらされ、人々がそれをおさめようとするエピソードを通じ、神々が常にこの世に関わりをもち影響を及ぼすという観念や、神々をどう敬うべきかを学び、共有し、後の世代に伝えていったのである。

情報伝達的手段として「物語」に優れている面があるのは、現代においても実感できるのではないだろうか。たとえば評論家が難しい言葉で社会を批判するよりも、社会批判を題材とした小説や映画の方が多くの人の心を捉え、影響を及ぼしうるのは想像に難くないだろ

う。ただし英雄の物語の影響力についてはギリシア特有の事情があったので、それは後述する。

さて、叙事詩が慣わしや行動原理を伝えたという点について、もう少しふみ込んでみよう。叙事詩において主に活躍するのは人間であるから、叙事詩には人間の模範を提供する意味があったと考えられる。哲学者プラトンの著作に伝えられるところでは、遙かな過去の物語を伝える詩人たちについて、有名な教育者が以下のように言及している（『プロタゴラス』325E-326A、岩波文庫より、藤沢令夫訳）。

「…子供たちが今度はさらに読み書きができるようになり、書かれたものを理解しようとするころになると、彼らにすぐれた詩人たちの作品を教室であてがって読ませ、それらを暗記するようにつける。その中には数多くの訓戒がふくまれているし、むかしのすぐれた人物たちを描写し称揚し讚美した言葉が数多くある。こうして、子供たちが讚嘆しながら見ならい、そのような人物になろうとあこがれるように仕向けるのである」

つまり詩人たちの語る神話は、特に子供たちを教育するための手段でもあった。人間がある場面でどう行動すべきかの模範として、戦場での名誉を求めたアキレウスや、知略をもって苦難を乗り越えたオデュッセウス、そのオデュッセウスの帰還を待ち続けた貞節な妻ペネロペ、そのほか様々な人間たちの姿が語り継がれたのである。もちろん、叙事詩は子供だけのものだったというのではない。成長してからも叙事詩に繰り返しふれて、こうした人間像を模範として意識することがあっただろう。

現代でも我々は、勇気とか正義とかいった抽象的なことを、幼いときにヒーローものなどの物語を通じて自分なりに理解したり、偉人の物語などを読んで、「そのような人物になろう」と思ったりする。このように物語に影響を受けるのは、先にもふれたように、古代と現代でも共通する部分があると思われる。ただし古代ギリシアの場合、神話を語り継いだ人々は、当代と隔てられた時代に偉大な英雄たちが生きていたという認識のもと、遙かな過去の時代に対して、畏怖、憧れを伴う強い関心があった²²⁾。そして英雄たちに比べれば、現実の人間は卑小な存在に過ぎないと考えられていた。そのため、英雄の物語に様々な面で教訓や模範が求められる傾向がとて強かったのである。こうしたなかでギリシア人は、太古の英雄をリアルに感じ敬いながら、豊かな英雄神話を語り継いだのであった。

このように見てくると、多くの市民を前に上演されるギリシア悲劇の題材が神話、特に英雄たちの物語だったことも、よく理解できる。国家的行事として行われる劇上演は、単なる娯楽ではなく、神話に当時の社会を反映させて、子供に限らず市民全体を教化したり、啓発したりする場でもあったのだ。

英雄神話の例を他にも挙げよう。トロイア戦争よりも古い世代の英雄で、悲劇の題材にもなっているヘラクレスは、ギリシア神話中もっとも豊富なエピソードを有するキャラクター

である²³⁾。その物語の多様さは、各地の英雄神話がヘラクレスにつながり合わされたり、別の英雄がヘラクレスと同一視されたりした結果と思われる。ヘラクレスはギリシア人のなかでも特にドーリス人（アテネのライバルだったスパルタなどがドーリス系ポリス）によって崇められた英雄だが、もともと存在したドーリス人がヘラクレスを崇めたというよりも、ヘラクレスを偉大な先祖として崇める人々が伝承の共有によって同族意識を育み、ドーリス人という集団を形成・維持していく一要因となったのではないかという意見もある²⁴⁾。

アテネにおいて、そのヘラクレスに対抗するかのようにイメージが作られていったのが、怪物ミノタウロス退治で知られる英雄テセウスである²⁵⁾。アテネ市民は、国家的英雄テセウスが太古に怪物を退治して平安をもたらしたとか、異民族を撃退して全ギリシアを防衛したといったような偉業の神話を創り上げていくことで、古くからの自国の威光を「創造」したのであった。

ところで、このようにして「創られる」ものである「神話」に対比される「歴史」記述の起源も、古代ギリシアにあるとされている。前5世紀のヘロドトス、トゥキュディデスは、当代の人間の戦争に目を向け、歴史を語ったわけだが、両者とも、多くの神話を歴史的事実として扱っていた。豊かな神話を通じて常に過去を意識していた精神性から、歴史が生まれたという面もあるだろう。歴史記述とはいかにあるべきか、神話と歴史が交差する古代こそ、歴史を学ぶ者は常にふり返る意味がある。もちろん、神話は歴史と究極的には同じなのだということではない。客観性を志向して、証拠に基づいて合理的に語られるべきなのが歴史研究である。ただし、「歴史的事実」が必ず公平に、客観的、絶対的に定められると安易に考えるのは危険であることは論を俟たない。ごく単純な例を挙げれば、歴史は勝者の視点で主観的に語られ、その認識が広まる。客観的事実が定められるよう志向すべきだろうが、「歴史」は絶対的客観性のもとに叙述されるのではないのだから、「神話」つまり伝統化され本当と考えられるようになった物語と、常に交差する可能性がある。さらにいえば、「神話」がリアルな影響力を持ちうることを、情報化社会ゆえ虚偽が渦巻く現代においてこそ、あらためて意識する必要があるとも思うのだ。

さて、上記のように神話は、それを語り継ぐ人々、社会、時代との密接な関係のもとに創造・再創造がなされるのだということをふまえ、今度は時間的視野を拡大し、古代にとどまらない神話と近現代の関わりについて一例を紹介したい。

(3) 女神と母権

古代ギリシアは男性中心社会だったが、そこでは多くの女神が男神と等しく、ときに男神以上に信仰されていた²⁶⁾。一見これは「ねじれ」のようにも思える。この点について、次のような見解がある。「太古、女神を主に崇拝する女性中心社会が存在したが、それとは異なる文化を有するヨーロッパ人の先祖が東方からやってきて、先住民社会を征服し、男性中心の社会に変えていった。神話の女神たちは、消し去られるのを免れた太古の名残なのだ」と

いう解釈である。そうした太古の崇拜対象と想定される女神は「大女神」とか「大母神」、英語では「グレート・マザー Great Mother」や「マザー・ゴッドレス Mother Goddess」などと呼ばれている²⁷⁾。

こうした見解に大きな影響を与えたのが、19世紀の学者ヨハン・ヤーコプ・バハオーフェン(1815～1887)の著作『母権論』(1861)だった。古代法の研究から古代社会に関心を抱いた彼は、おもにギリシア神話における女性や女神の活躍、重要性に着目して、女性が政治や家族内で権力を掌握した「母権制」が、古代ギリシアよりもずっと昔の太古の時代に存在したと主張した。

その人類史的考察は多方面に波及したが、当初から多くの批判も受けてきた²⁸⁾。なにより、説得力ある具体的証拠に欠けていたのである。現代にも、母権的と捉えられる少数民族が(たとえば中国や南米などに)たしかに存在するが、それを人類史に投影できるのか、太古の時代に遡って完全な母権制があったといえるのか、ということになると、否定的な見解のほうが多数を占めている。

一方、母権論の継承者というべき人物が、リトアニア出身でアメリカに渡った女性考古学者のマリヤ・ギンブタス(1921～1994)である。彼女の主張は、以下のようなものだった。「古代ギリシア人をはじめとしたヨーロッパ諸民族の先祖の到来以前、前七千年紀から前五千年紀に南東ヨーロッパに栄えた新石器文化に見られる偶像はほとんどが女性像で、生命を生み出す女性をかたどったものと考えられる。それらが示すのは、生命をもたらしてくれるという類推から大地や自然を女神として崇め、女性を敬い、自然と調和した平和な母権社会である」(『古ヨーロッパの神々』1974年)。

古くは旧石器時代から、石や骨製の小さな女性像が作られていた。多くは5センチメートルほどの大きさで、極端に小さな顔と手足に対して、乳房と腹部が大きく強調して作られているのが特徴である。生命を生み出す女性(妊婦)の姿を強調して描いたものとも考えられ、「ヴィーナス像」と呼ばれている。有名なのがオーストリアで発見された「ヴィレンドルフのヴィーナス」で、高さ11センチメートルあまり、推定では24000～26000年前のものである。母権社会はこのような大昔までさかのぼりうると、ギンブタスやその支持者は想定する。

バハオーフェンの時代には見つかっていなかった、多くの女性偶像という「証拠」に基づくこの見解は、太古の母権についての議論を再燃させ、批判にさらされながらも広まっていった。ギンブタスによれば、「ギリシアを含む南東ヨーロッパの先史時代は、大母神を崇める母権社会だったが、ギリシア人の先祖など男神を崇める人々が到来し、先住民社会を破壊・征服して、戦闘的な父権社会が確立した。父権社会の発展とともに太古の女神崇拜はおとしめられたのであり、たとえばギリシア神話の女神たちはその残影」とされるのである²⁹⁾。

母権学説の再考

バハオーフェンがおもに依拠したのは古代ギリシアの神話だったが、すでに述べてきたように神話は語られる時代を反映して変化することもあるわけで、ありのままの太古の出来事を伝えているわけではない。そうした成り立ちをふまえず、歴史的事実を伝えているものとして神話を不用意に扱っているバハオーフェンの主張は、やはり根拠薄弱だったといわねばならない。

ギンブタスの主張も推測に大きく拠っており、問題をはらんでいる。女神をかたどったとされる女性偶像だが、誰が何の目的で作ったのか確実にはわからない。何らかの理由で男性が男性のために作ったもので、そこに女性への敬意はまったく存在しないかもしれないのである。

ギリシア神話の女神たちが、ある程度は先住民の信仰からの連続性を有している可能性は十分にあると筆者も思う。また、父権社会が始原より存在したと普遍化してしまうのも単純に過ぎるので、太古の時代に、現実の女性への敬いが、のちの男性中心社会よりはあったとする可能性も否定すべきではないと考える。しかしそれを「母権」と捉えるかどうかは、「母権」をどう定義するかによる。

そして、男性中心社会だったアテネの守護神が戦いと知恵の女神アテナであったように、女神を崇拝することは現実女性への敬いや女性の権利に単純に直結はしないということを強調しておきたい。それに、神話に語られ崇められた多様な女神たちを、「大母神」にさかのぼるとして一元的に理解することは、女神をひっくるめて「太古の遺物」にしてしまうことにもなる。女神たちは単なる遺物なのではなく、子孫を生き育てていくなどの面はもちろん、様々な形で女性を必要としていた（ときに都合よく利用しようとした）社会が、女性の象徴として再生産し続けたものであり、だから多様な女神が生き生きと思い描かれたのである。

神話解釈の背景

実は近現代においても、神話を理解する側の思想、時代状況が、解釈に影響を与え、神話が「再生産」、「再創造」されているような場合があるから、神話を研究する際には「神話解釈の歴史的解釈」とでもいうべき視点も必要とされる。そこで上記の女神解釈を例に、背景には何があるのか考えてみよう。

女性が権力を有する時代があったという、バハオーフェンの母権論のような考え方は、決して女性賛美ではない。乗り越えられた（乗り越えられるべき）時代として、母権制がギリシア神話の中に捉えられているのである。こうした考え方の背景には、母権論が登場した19世紀の、「進歩」のパラダイム（思考の様式、枠組みのようなもの）があった。当時のヨーロッパといえ、産業革命を経て工業化を進め、科学技術を発展させ、また世界に植民地を有して栄華を誇った、様々な面での「進歩」の時代である。もちろん「進歩」の尺度はいろ

いろいろあるが、人間の歴史は「進んでいく」という漠然としたイメージが、バハオーフェンの生きた19世紀のヨーロッパでは浸透していた。そうしたなかで母権学説には、母権社会から父権社会へ進むのが人類史の正常な進歩の道筋であるという認識が映し出されている³⁰⁾。母権学説それ自体が、古代神話の解釈によって生み出された「近代の神話」でもあったといえるだろう。

次にギンプタス説をめぐる状況を考えてみよう。1970年代、戦争は無くならず、いっばうで環境問題が取沙汰されるようになってきた状況のなかでギンプタスは、「戦闘的で、自然を敬わない男性的文明が築かれてきてしまった」と考え、「太古に存在した、女神を信仰の中心とする女性中心の母権社会」に目を向け、新しい世界観を構築すべきだというメッセージを発していたといえる。こうした見方に共感する人々は、特に当時のウーマン・リブのもとではもちろん女性に多かっただろう。いつの時代にもいるであろう、世に閉塞感を感じて新しい価値観を求めるような人であれば、男性でも大いに共感をおぼえたことは想像に難くない³¹⁾。1970年代といえば、精神世界や新しい宗教への関心が高まった、いわゆる「ニューエイジ」の時代でもある。ギンプタス説は、そうした思潮にも合致するものだった。

また、西洋において既存の価値観の代表格たるキリスト教は、イエスという男性の姿で神を具体的にイメージしてきたし、男性しか聖職者になることができなかったように男性中心の傾向を有していた。それに、人間のために神が自然を創造したという聖書の記述から、自然を敬うとか人間が自然と共存するという思想はキリスト教に本来ない（あくまで本来なかった、ということで、現代に至るキリスト教の歴史において完全に存在しないというのではないが）。よって特に西洋において、「自然」との調和をもたらす「女神」は、人間の歴史を再考するきっかけ、新しい世界観を提示する、刺激的なツールでもあったのだ。神話は、人々の様々な思いを映し出ししながら、生き続けるのである。だからこそ、学ぶべき意義が大いにある。

おわりに

本稿は、筆者のこれまでの実践に基づいてまとめたので、反面かなり限られた考察にとどまったのだが、「神話」と聞いて良くも悪くも反応を示すような方々にとって、何か少しでも参考になれば幸いである。

いうまでもなく神話は歴史記録ではない。歴史の対極にあり、その点ではたしかに歴史研究において神話を扱うことにまず違和感があるかもしれない。しかし、社会に広まっていたある神話について、「それがなぜ語られたか」、「どんな影響をもたらしたのか」等を考えていったとき、神話は立派な史料でもある。また神話は、歴史と異なるからこそ（いっばう、先述のように接近してしまうこともあるからこそ）、歴史記述がいかにあるべきかを照らし

出しもする。

過去に向き合う歴史研究においては、「我々と違う、過去の人々の考え方を理解すること」が常に求められる。我々からすると非合理的な内容を多々含むが、当代の人々が信じ、語り継いでいた「神話」は、「我々と違う、過去の人々の考え」の最も象徴的な例といえよう。その神話の意味を理解したとき、我々は過去の理解を深めることができているのである。神話理解とは、歴史研究全体に通底する実践演習でもあるような作業なのだ。そして、ある神話がなぜ語られたかを分析していくと、その中核にある歴史的事実の抽出というフィードバックにもつながるかもしれないのである。

さらに、西洋の文芸はもちろん、女神イメージの例のように古代神話は後世に影響を与え続け、神話をもとにした映画などのポップカルチャー、神話イメージ表現も現代にあふれている（スターバックスのシンボルマークを見よ）。人間の歴史とともに、神話は常にあった。神話の歴史的考察は、いつの時代も神話を必要としてきた（そしてこれからも必要とするだろう）人間の探究でもあるのだ。

註

- 1) 神話の定義をめぐる諸問題については G・S・カーク（辻村誠三他訳）『ギリシア神話の本質』法政大学出版局、1980年、第1部「神話の本質」参照。
- 2) W・ブルケルト（橋本隆夫訳）『ギリシャの神話と儀礼』リプロポート、1985年、35頁以下。
- 3) 前700年頃のヘシオドスの詩『仕事と日』における五時代説話には、そうした英雄の時代と自らの生きる時代との断絶の意識が見て取れる（157行以下）。すなわちそこでは、高貴な英雄たちの時代と卑小な人間たちの生きる当代（鉄の時代）とが対比されているのである。また歴史家ヘロドトスも人間の時代と英雄たちの生きた時代とを明確に区分している（3巻122章）。詳しくは以下を参照。L. Edmunds, "Introduction: The Practice of Greek Mythology" in: L. Edmunds (ed.), *Approaches to Greek Myth*, Baltimore, Md., 1990, pp.1-20.
- 4) 「ミュートス」の意味の変遷については、B. Lincoln, *Theorizing Myth*, Chicago and London, 1999, Ch.1.
- 5) 吉田敦彦・松村一男『神話学とは何か』有斐閣、1978年、34頁。
- 6) ドゥティエンヌは、「神話」が近代以降において「創造」されてきたことを強調し、神話概念の普遍性に根本的な疑義を呈した。M. Detienne, *L'invention de la mythologie*, Paris, 1981. また、宗教学者ストレンスキーは、そもそも「神話」というカテゴリーは実体のない幻想、虚構の産物であるとする（I. Strenski, *Four Theories of Myth in Twentieth-Century History*, London, 1987）。ただしこれはかなり極端な意見であって、受け入れられている見方ではない。
- 7) ギリシア神話全般についての日本語の入門書として、ひとまず以下を挙げる。西村賀子『ギリシア神話』中公新書、2005年；呉茂一『ギリシア神話 新装版』新潮社、1994年（新潮文庫版もあり）。また神話学者の吉田敦彦氏の著書に、入門と題した『ギリシア神話入門—プロメテウスとオイディプスの謎を解く』（角川選書、2006年）もあるが、氏が著した（あるいは監修した）より一般向けのギリシア神話解説書がほかに多数あるので、初学者はまずそれらからギリシア神話に親しむのも良いだろう。なお本稿筆者も、現代への神話の継受と影響に着目したギリシア・ローマ神話の入門書をすでに執筆しており、2015年に刊行予定である。外国語文献では、個別に神々・英雄について解説している *Gods and Heroes of the Ancient World* (Routledge) というシリーズが入門に良い。ギリシア神話全体については、R. D. Woodard (ed.), *The Cambridge Companion to Greek Mythology*, Cambridge, 2008.

- 8) 古代神話の継承については、P・M・シュール他(野町啓他訳)『神話の系譜学』平凡社、1987年。
- 9) たとえば、主に古典文学系の多彩な論考を収録している以下の書が参考になろう。川島重成・高田康成編『ムーサよ、語れ—古代ギリシア文学への招待』三陸書房、2003年。文学系研究者による入門書としては、高橋宏幸『ギリシア神話を学ぶ人のために』世界思想社、2006年。「神話」に少しでも関わるとなれば、その研究は膨大であり、ここで網羅することはできないので、もし関心があれば註に挙げる文献をあくまで一つの入り口として、さらに関連研究、参考文献等をたどっていただきたい。
- 10) 哲学・思想と関連する拙稿に「古代ギリシア像と神話をめぐる精神史」(『歴史学研究』807号、2005年、146-153頁)がある。神話をそもそも「非合理」と考え、「神話から理性へ」という図式で人間精神の発展を理解してしまうことの問題点を扱っている。また、たとえば特にヘシオドスについてなら、広川洋一『ヘシオドス研究序説—ギリシア思想の誕生』(未来社、1975年)といった研究がある。最近出版された翻訳書に、R・S・コールドウェル(小笠原正薫訳)『神々の誕生と深層心理—ヘシオドスの神統記とその周辺』(北樹出版、2013年)もある。
- 11) 西洋史研究者による神話理解の例としては、藤縄謙三『ギリシア神話の世界観』新潮選書、1971年。また筆者も西洋古代史がもともとの立脚点なので、後述していく拙稿も参照。ギリシア宗教史については以下を挙げる。W・ブルケルト、前掲書(註2); W・ブルケルト(前野佳彦訳)『ホモ・ネカース—古代ギリシアの犠牲儀礼と神話』法政大学出版局、2008年; W. Burkert (trans. by J. Raffan), *Greek Religion*, Cambridge, Mass., 1985; J. D. Mikalson, *Ancient Greek Religion*, Malden, 2005; D. Ogden (ed.), *A Companion to Greek Religion*, Malden, 2007; E. Kearns, *Ancient Greek Religion: A Sourcebook*, Chichester, 2010.
- 12) たとえば以下を参照。長田年弘『神々と英雄と女性たち—美術が語る古代ギリシアの世界』中公新書、1997年; T・H・カーペンター(眞方陽子訳)『図像で読み解くギリシア神話』人文書院、2013年; J. M. Barringer, *Art, Myth, and Ritual in Classical Greece*, Cambridge and New York, 2008.
- 13) 神話学とその発展史については、吉田敦彦・松村一男の前掲書のほか、松村一男『神話学講義』角川書店、1999年。なお、神話学について詳しく解説することは、ギリシア神話を主眼とした本稿の範囲を越えるので、たとえば神話に「三分イデオロギー」を見たデュメジルや、レヴィ=ストロースによる神話の構造分析等にはここでふれない。上記の書を参照。ただし、構造分析に影響を受け、特にギリシア神話を対象にした研究として、マルセル・ドゥティエンヌ(小荊米けん・鶴沢武保訳)『アドニスの園—ギリシアの香料神話』(せりか書房、1983年)や、下記(註15)のヴェルナンを挙げる。
- 14) Cf. Richard H. Armstrong, "Psychoanalysis: The Wellspring of Myth?" in: K. Dowden and N. Livingstone (eds.), *A Companion to Greek Mythology*, Chichester, 2011, pp.471-485.
- 15) たとえば以下が参考になろう。J = P・ヴェルナン(上村くにこ他訳)『ギリシア人の神話と思想—歴史心理学研究』国文社、2012年。多様な研究の在り様についてはさらに以下を参照。F. Graf (trans. by T. Marier), *Greek Mythology: An Introduction*, Baltimore and London, 1993; K. Dowden and N. Livingstone (eds.), *op.cit.*
- 16) 神話、宗教が大きな役割を果たしたであろう民族意識形成について詳しくは、J. M. Hall, *Hellenicity: Between Ethnicity and Culture*, Chicago and London, 2002.
- 17) こうした東方からの影響をめぐる諸問題と、神話との関わりについては、拙稿「古代ギリシアとヨーロッパ・アイデンティティー—ヨーロッパの源流としての古代ギリシア像再考」谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、2003年、32-55頁。
- 18) D・トレイル(周藤芳幸・北村陽子訳)『シュリーマン—黄金と偽りのトロイ』青木書店、1999年。
- 19) トロイア戦争の史実性については、D. Hertel, "The Myth of History: The Case of Troy" in: K. Dowden and N. Livingstone (eds.), *op.cit.*, pp.425-441.
- 20) ホメロス研究の蓄積は膨大で紹介しきれないし、ホメロスとは何者でどのように叙事詩が成立したのかという「ホメロス問題」にもここではふれられないので、参考に藤縄謙三『ホメロスの世界』(新潮選書、1996年、魁星出版より2006年に再刊)、西洋古典文学の研究書として岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』(創文社、1988年)を挙げておく。なお特に『オデュッセイア』に

- については、岩波書店の『あたらしい古典入門』シリーズの一書として、西村賀子『オデュッセイア—戦争—を後にした英雄の歌』（岩波書店、2012年）が近年刊行されている。
- 21) こうした観点については、E・A・ハヴロック（村岡晋一訳）『プラトン序説』新書館、1997年、第一部。
 - 22) ギリシア人の過去への意識をふまえながら、先述の哲学者プラトンが語った有名なアトランティス物語（はるか大昔に繁栄した島が神罰で海中に沈んだという伝説）の意味と影響について論じたのが、拙著『アトランティス・ミステリー—プラトンは何を伝えたかったのか』（PHP新書、2009年）である。
 - 23) ヘラクレスの神話については、内田次信『ヘラクレスは繰り返し現われる—夢と不安のギリシア神話』大阪大学出版会、2014年。
 - 24) 詳しくは、J. M. Hall, *Ethnic Identity in Greek Antiquity*, Cambridge, 1997.
 - 25) テセウスについては、拙稿「古典期アテナイにおけるテセウス伝説—古代ギリシア人にとっての過去をめぐる—考察」『古代文化』57巻1号、2005年、17-29頁。
 - 26) 以下の女神イメージをめぐる議論については、拙稿「古代ギリシアにおける女神の象徴性—アテナ、アルテミス、デメテルを例に」『西洋古代史研究』11号、2011年、63-81頁。ギリシア社会と女性、そして関連する神話解釈については、桜井万里子『古代ギリシアの女たち—アテナイの現実と夢』中公文庫、2010年。
 - 27) 女神と大母神をめぐる問題については、前掲の拙稿のほか、松村一男『女神の神話学—処女母神の誕生』平凡社、1999年。
 - 28) 批判については、S・ジョルグディ（杉村和子訳）「パハオーフェン、母権制、そして古代世界—つくられた神話に関する考察」G・デュビィ、M・ペロー監修『女の歴史I 古代2』藤原書店、2001年、737-761頁。
 - 29) ギンプタスの影響については、小松加代子「女神信仰」田中雅一・川橋範子編『ジェンダーで学ぶ宗教学』世界思想社、166-182頁、特に169-174頁。
 - 30) 上山安敏『神話と科学—ヨーロッパ知識社会 世紀末~二十世紀』岩波現代文庫、2001年、293-377頁参照。
 - 31) ギンプタスの解釈図式は「基本的に正しい」とする松村一男氏も、「男女平等を実現しようとしていた米国だからこそ、ギンプタスの説は学問的解釈に留まらず、男性優位の現代社会のあり方に対するプロテストやオルタナティブとしても受けとめられ、広く一般社会にもアピールしたと思われる」と指摘している。松村一男「神話」田中雅一・川橋範子編、前掲書、114-129頁。